

特集

聖学院教育のアップデート

●在校生の活躍 特別企画

聖学院小学校60周年記念対談



CONTENTS

01 & Talk [聖学院教育のアップデート]

05 focus-聖学院教育のアップデート
[聖学院小学校]

06 focus-聖学院教育のアップデート
[女子聖学院中学校・高等学校]

07 focus-聖学院教育のアップデート
[聖学院中学校・高等学校]

08 focus-聖学院教育のアップデート
[聖学院大学]

09 在校生の活躍特別企画
聖学院小学校60周年記念対談

11 Seig NEWS

14 Our Mission

15 聖学院歴史探訪

聖学院ニュースレターアンケート

QRコードからあなたの声をきかせてください。
アンケートに回答いただいた方の中から抽選で10
名様に「聖学院オリジナルキーホルダー」をプレ
ゼント!



●有効回答期間
2021年3月28日～5月31日

●当選発表
当選者の発表は、賞品の発送をもって
代えさせていただきます。



本アンケートに関するお問い合わせ
聖学院広報センター Tel 03-3917-8530

編集 / 学校法人聖学院 広報センター
デザイン / 株式会社キュー・ジー
発行日 / 2021年3月19日

昨年3月以降、社会のあり方が一変しました。教育も例外ではなく2020年4月7日の緊急事態宣言から2ヶ月近く子どもたちは学校で授業を受けられなくなりました。あれから1年、今でも従来とは違った形で授業が行われています。そしてそこからは新しい形式やシステム、学びに対する考え方が生まれつつあります。聖学院中学校・高等学校（以下中高）でウィズコロナでの教育改革に取り組まれた日野田昌士先生と、聖学院大学（以下大学）でオンライン授業の環境作りや推進に尽力されたロバート・J・S・ローランド先生、情報センターの清水佳人さんに4月の緊急事態宣言当時のことをはじめ、この1年で教育がどう変わったかについてお話を伺いました。

かつて経験したことがない緊急事態宣言。教育の現場で起こっていたことは

——緊急事態宣言の決定から発令までほとんど日がありませんでした。混乱もあったのではないのでしょうか？

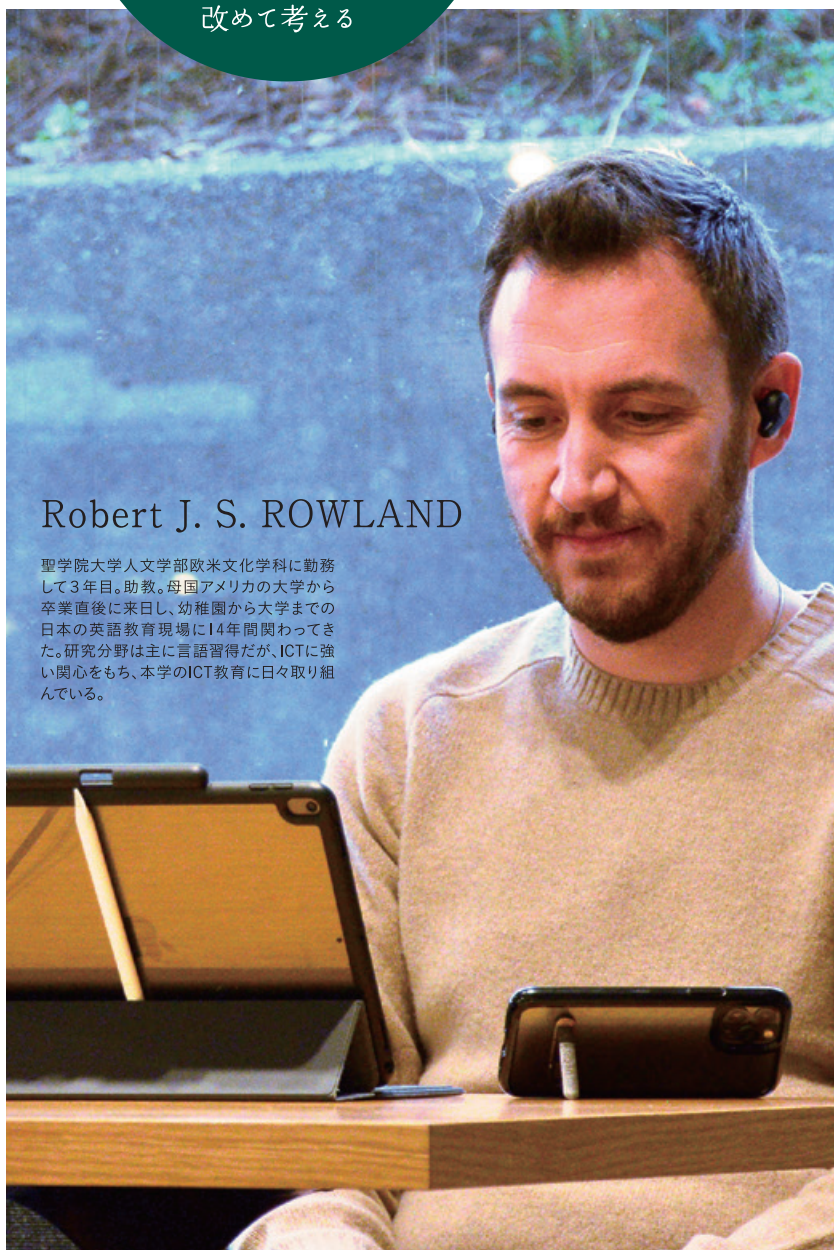
聖学院教育の アップデート

“教育とは何か”を
改めて考える

& Ta

Robert J. S. ROWLAND

聖学院大学人文学部欧米文化学科に勤務して3年目。助教。母国アメリカの大学から卒業直後に来日し、幼稚園から大学までの日本の英語教育現場に14年間関わってきた。研究分野は主に言語習得だが、ICTに強い関心を持ち、本学のICT教育に日々取り組んでいる。



清水 教職員に、オンラインに慣れている人があまりいなかったためテレワークやオンライン授業と言われても何をして良いのか分からないという状況でした。そのため情報センターの課員がテレワークやオンライン授業のサポート体制を整えるところから始めました。インフラが整った後の対応としては例えば紙の資料をどう取り扱うかなど具体的なアドバイスを連携しながら行いました。また初期の頃は教職員にスマホを活用してもらいました。スマホにはカメラもマイクも内蔵されています。皆さん必死になって取り組んでくださったので、慣れていない人が多いとはいえ想定より遥かに早くオンライン化が定着しました。

日野田 中高は、4月6日に始業式・入学式を予定していましたが、全学年が一斉登校できる状況ではなかったため中1、高1と高3だけ登校してもらい、入学式と今後の対応を説明しました。そのあとオンラインツールとして使う予定だったGoogle Classroom^{※1}の講習を、新入生には保護者同伴で行いました。生徒のスマホにはペアレンタルコントロール^{※2}がかかっていることも多く、150人中、70~80人は思うように

できませんでした。そこで全教職員総出で一人ひとりトラブルシューティングをしていき、その日をなんとか乗り切ることができました。

課題となったのは翌4月7日です。中2、中3、高2の生徒が登校予定だったのですが、緊急事態宣言で来られなくなりました。そのため4月7~9日の3日間、zoomを開設し、アクセスできる生徒にはzoomで指導し、Google Classroomの招待に応じられない生徒には担任の教員が全員電話で対応してくださいました。それが最初の1週間です。

——中高は緊急事態宣言から1週間後には授業動画を100本配信し始めてます。なぜそんなに早い対応ができたのですか？

日野田 この戦いの長期化を想定し、「時間をかけた議論よりも何かをやらなければならない」と決めました。とりあえず動かないと景色は変わりません。やってみて上手くいかなかったら調整をし、上手くいったら共有し広めていくというスタンスをとることにしました。

ただ、みんなができる最低限のラインで動き出そうということにな

新型コロナウイルスにより教育は今までのフォーマットが通用しなくなりました。

目の前に生徒がいない状況でどう学びを成立させるか。

その答えを考えるには、「教育とは何か」という根本に立ち帰る必要がありました。

教育は今、新しい局面に入り始めています。

lk



日野田 昌士

聖学院中学校高等学校総務統括部長(教頭)。同志社国際中高、同志社大学法学部卒業後、聖学院中学校高等学校に公民科教諭として勤務。
「教育が変わることによって社会が変わる」がモットー。



清水 佳人

学校法人聖学院情報センター事務室勤務。聖学院大学欧米文化学科を2004年度卒業後、派遣で聖学院大学のコンピュータ基礎の講師をし、2009年に聖学院ゼネラルサービスに転職、2011年に現在の情報センター事務室に至る。主に大学を拠点としてICTに関わる業務・システムに携わっている。

り、教員1人2本ずつ動画を作ることになりました。各学年5教科の教員が2本ずつ作り最初の週の授業動画が100本になりました。

逆にそれ以上のことは制限しました。そうしないと得意な教員と苦手な教員の間に衝突が起これると思ったからです。やりたい教員の「やりたい」というモチベーションは維持し続けなければならないし、苦手な方もやっていただかなければいけない。そこで1人2本。ベテランも若手も頑張る。苦手な人は聞く、得意な人はやり方を共有する。そのような対応をとるのに2本がちょうどよかったのです。

――大学の組織としてのルール作りはどのように行われていたのですか？

ローランド 大学は中高に比べると、教員の自由度は高めに設定されていました。緊急事態宣言が出た後、教育支援課を中心に情報センターや私に加わって、オンライン授業のガイドラインを作りました。Teams等を使った同時双方向型の授業をするA型、中高のようにオンデマンドで授業動画を配信し課題を出すB型、課題の出題と採点に重点をおいたC型の3つの形態を用意し、そのいずれかで授業を行うというガイドラインです。教員個々の教えやすさに加え分野ごとの特性もあるので、みんな同じ方式で、というより、選択できる方が良いのではと考えこの形になりました。ただオンライン授業が初めてという教員がほとんどなので、全教員対象の研修会を行いサポートしていました。オンラインの場合、対面と大きく異なるところがあります。例えば出欠の根拠（何をもち出席とするか）、課題の分量（学生が在宅だと過度に課題を出す傾向がある）、オンラインでの自分のスキルの把握（普通の授業スキルとオンラインでのスキルは違う）などです。そういった違いに気づき考えてもらうための研修会です。また自分に合う授業形態を見つけてもらうことも研修の目的の一つでした。

当時、大学から教員にあまり積極的に働きかけないようにしていました。とにかく1学期は学生も教員も必死だったので、それ以上負荷をかけて教員がパンクするよりは、学生がちゃんと受講できることを優先したためです。



「教員と職員が両輪となってこの難局を乗り越えようという意気込みが感じ取れました」と語る清水さん

清水 先ほど日野田先生もおっしゃっていましたが「無理せず1人2本」とか「ここは制限する」というルールは大学でも作っていました。ルールとは少し離れますが、聖学院にはLMS^{※3}があり、学生たちの学びを止めないよう、このシステムをうまく活用していけないかという話し合いも行われました。基本的には職員側から教員方に提案をするのですが、教員方からも「こういうことができないだろうか」という相

談を受けることがあり、コロナ対応においては本当に教職協働、教員と職員が両輪となってこの難局を乗り越えようという意気込みが感じ取れました。



「動画であっても課題であっても反対側に人がいるという意識を持つこともオンライン化していく社会では必要なことです」と語るローランド先生

社会のデフォルトになるであろうオンライン化への適応

――オンライン授業で特に意識していることはどんなことですか？

ローランド 清水さんともよく話しますし、学生にも当初から言うことですが、社会全体もオンライン化に慣れ、この状況はコロナ禍が収束しても間違いなく続きます。来年度学生がキャンパスに戻れたとしても、就職するときには今までとは違う働き方になっていることでしょう。だから学生は今も辛くてもオンライン化に適応する必要があります。学生は12年以上、教室という一定の環境で教育を受けてきているので環境の変化についていくのは大変だと思います。あまり構えず「こういう教育もある」くらいに考えて慣れていかなければなりません。

また教員にとってもオンライン授業が初めてという方もたくさんいらっしゃいます。学生はそのことも踏まえ、わからないことや、こうしてほしいという要望があったら、教員にどんどん伝えた方が良いと思います。動画であっても課題であっても一方的に配信しているわけではなく、その反対側に人がいます。そういう意識を持つこともオンライン化していく社会では必要なことです。

清水 私たちは職員なので学生に直接教えることはしませんが、職員の間で「私たちは今何ができるんだろう」「どういうことで、学生たちの学びを支えられるだろう」という話し合いが持たれました。まず、教員の動画のアップ先、連絡手段、学生や保護者にどう説明するかなど教育環境の土台の整備から始めました。今の教育支援課マネージャーの原田さんやICTが得意な教育支援課員のひとたちと連動して「こういう風なら良いよね、ああいう風なら良いよね」と夜通し話し合っていました（笑）。日中は学生や教職員のサポートがメインなのでどうしても会議は夜でした。ただそれによって、部署間の横の連携ができるようになったのは確かです。いろいろな部署との連携がかなり強くなったと感じています。

「StudentからLearnerへ」主体的に学ぶ生徒の育成

――教育環境や教育法にはどのような変化がありましたか？

日野田 大きな変化としてICTがあります。校内のWi-Fiの問題とか端末、設備投資の議論が一気に進み、2学期からBYOD^{※4}という形で生



徒1人に1端末という状態が実現しました。以前は校内で携帯を無断で使ったら没収というルールがあったことを考えると、驚くほどの変化です。これによっていろいろなチャレンジができるようになりました。

また教育法に関しては、4～5月を通して、教育は強制だと成立しないということを経験し実感しました。生徒が学びたいと思えるようにどう授業をデザインすれば良いか、結構悩みました。加えてオンライン授業という環境を通して、生徒それぞれの学習に対するモチベーションの置き方が異なっていることもわかってきました。理論的な裏付けがあることを知るとやる気になる生徒もいれば、実効性を感じることがモチベーションにつながる生徒、探究的な問いに刺激を受ける生徒もいます。そういうことがわかっているにもかかわらず、6月以降対面授業ができるようになったら従来通りの画一的な学びに戻すということはありません。私たちが育てたい生徒像はどんなものなのか、改めて教員間で話し合いました。その結果、スクールモットーである「Only One for Others」を体現するためには受動的な教えられる存在「Student」ではなく、自分で学びをデザインし主体的に学ぶ存在「Learner」を育てるというコンセプトで一致しました。このコンセプトが共有できたことは教育面での大きな変化でした。

BYODの実現も「StudentからLearnerへ」というコンセプトを後押ししてくれました。1学期まではドリル形式の「宿題」が多かったのですが、2学期からは探究的な「課題」が増え、強制的な学習から主体的に取り組む学習に変えるチャレンジが増えました。

ローランド 学習において、主体的に興味を持って関わられるかどうかで成長が全然違います。学び手が興味を持ってないと学習そのものを継続できませんし仮に結果が出たとしても自ら獲得したという実感が薄く、成果が自信につながりにくいという点があります。



「受動的な教えられる存在「Student」ではなく、自分で学びをデザインし主体的に学ぶ存在「Learner」を育てる必要があります」と語る日野田先生

コロナ禍で進化した教育の課題

――緊急事態宣言から1年弱、新しい環境での教育を経験し、今後の課題、または今後進化させていきたいことはどんなことですか？

日野田 中高の教育現場で今一番議論になっているのが評価をどうするかです。今までは定期試験に加え、授業中の発言やノートなどが主となる平常点の2つで評価をつけていました。しかし昨年度3月の定期試験も実施できませんでしたし、そもそも従来型の平常点がつけられません。オンライン授業が難しかった芸術系の科目も課題です。授業の内容とどう連動させて評価をつけるか、その辺りが来年度の課題

になりそうです。

教育面ではとにかく「Learner」をいかに育てるかが中心になります。「学ばされる」ではなく「学びたい」と思えること、これはつまり教員がいなくても自分で学べる生徒ということです。そのような生徒を育成するのが本来の教育の仕事だと思っています。

ローランド 日野田先生の話にとっても感同します。今までの大学の教育は先駆者である教授の研究を座学で聞いて再現して近づいていくという比較的受け身の形態だったと思います。この1年で、主体的に学ぶことがより重要になり、教育とは何かということを深く考えるきっかけになったと思います。自分もそうですし自分が所属する学科、学部、そして大学、法人全体で「学びとは何か」を考え、形にしていけたら良いと思います。

この1年、なんとか乗り切ったということがたくさんあると思います。その「なんとか乗り切った」ことを自信に変えて、学生も教員も身につけたICTのスキルをいかし、一人ひとりにフィットしたより良い教育につなげていくのが今後の目標です。

清水 今日の先生方のお話を伺って、より良い教育のためにいろいろ考えていただいていることが改めて良くわかりました。とてもありがたいと思っています。それをどうやって具現化するかが私たちの仕事だと思っています。そのために何を揃え準備すべきかを考えていきたいですし、教員と職員でもっと連携してより良い環境を作っていきたいと思っています。

(取材日/2021年2月)

※1 Google Classroom

Googleが教育現場向けに提供している無料ツール。教育者側は、生徒を登録して「クラス」を作成し、教材・課題の一括配布・進行チェック・採点を行うことができます。課題の結果に基づき、各生徒にフィードバックを送ることも通知や質問の投稿も可能です。(参考:リセマム「Google Classroomとは【ひとこと言うと?教育ICT用語】」)

※2 ペアレンタルコントロール

保護者が子どもの情報機器の使用やコンテンツの視聴の一部を制限するための機能やサービスです。主に成人向けに提供されているコンテンツやサービスに子どもがみだりに接触しないようにするために用いられます。(出典:IT用語辞典 e-Words)

※3 LMS (Learning Management System)

eラーニング(コンピュータを使った学習・教育)において、「受講者」「講座内容」「進捗」の管理を行うシステム。載せるコンテンツを変えることで、さまざまな学習に対応できます。また進捗を管理することで、カリキュラムの難度を調節することも可能です。eラーニングでは、均一な授業を広範に行うことが可能なため、基礎教育などに向いているとされています。(参考:リセマム「LMSとは【ひとこと言うと?教育ICT用語】」)

※4 BYOD (Bring Your Own Device)

自分の所有する端末や自宅にある端末を学校に持って行って利用する形。デンマークなど、海外では多く見られるスタイルで、日本でも一部の高等学校ではBYODが採用されている。(参考:総務省「クラウド導入ガイドブック2015」)

focus* (聖学院教育のアップデート)

社会の変化に対応した各校の新しい教育への取り組みをご紹介します



ICTを使うことで、安全を確保しながら協同学習が再開できるかもしれません。(ICTを使った授業の様子[2018年撮影])



(上)再び休校になったときにも対応できることがこの研修の目的の一つです。避難訓練のように、定期的に続けていきたいと考えています」と語る田村教頭先生。

(下)写真奥の小型のホワイトボードに書いたものを書画カメラで撮影。zoomでは黒板そのものが見えにくいため、機材にも工夫をして授業を進めることが検討されています。

聖学院小学校

オンライン授業の取り組み



クリスマス礼拝とページェント

毎年女子聖学院のチャペルを借りて行なってきた礼拝とページェント。今年は発表する児童だけを小学校のチャペルに入れて、オンラインで配信しました。配信なのでいつもは鑑賞することができない保護者も今年は鑑賞することができ、表情もしっかり見ることができました。

オンライン授業を通して見えてきた教育の原点

聖学院小学校では教員に向けたzoomによる模擬授業を実施し、オンラインを使った双方向授業の形を研究しています。この取り組みは、もしまた休校することになった時、子どもたちにスムーズに学びを届けるためであり、また教室とは異なる、オンラインならではの授業の進め方を模索するためのものでもあります。

この中から見えてきたものとして、教室と同じ時間では子どもたちの集中力がもたないこと、その分授業時間外でじっくり自分で考える課題を出すことなどがあります。この自主的に考える課題について田村教頭先生は「教師がその場にはいないからこそ、子どもが主体的に関わろうとする課題を出さなければいけません。それにより考えることを面白いと思わせる。そこに教育の原点があるのではないのでしょうか」とおっしゃいます。

教室での授業が再開された今、課題となっているのは協同学習ができないことです。協同学習とは、小さいグループを作って、その中でそれぞれに役割を与え、役割を果たすことで学びを深めるというシステムで、聖学院小学校の特色ある学びの一つです。残念ながら今、教室で行うことはできませんが、オンラインのグループ分け機能を使えば、今できない協同学習を行うことができそうです。人と人との関わりが疎(そ)と思われたオンライン授業が、考え方を変わると逆に人と人とを結びつける可能性を持っているとも考えられます。一見できることが制限されたかのように思いがちですが、見方を変えればオンラインという新しい選択肢が増えたとも言えます。田村先生は今の状況を「日々教育の中で当たり前に行なっていることを改めて考え直す機会になった」ともおっしゃっています。教えることの本質を考えることで、新しい教育の形が見えてくるのかもしれません。

女子聖学院 中学校・高等学校

探究・ICT委員会



ICT for JSG

ICT教育推進委員会ではメンバーの打ち合わせ内容などの情報を共有する目的で、不定期にNEWS LETTERを発行し学校内に掲出していました。これまでにVol.10まで発行されています。

「学習する学校」を体現する探究・ICT委員会の活動

2月24日(水)、探究・ICT委員会の第5回目となる教師研修会が行われました。この日は2021年度に中学全学年で同時に開始する探究活動の前期計画案を通して、生徒が主体的に学ぶための動機づけや学習方略、メタ認知の3観点を理論的に捉える「自己調整学習」と、探究活動での意識づけに据える『クリティカル・シンキング→フィードバック→リフレクション』のサイクルの重要性について「リーダーシップ教育」の理論を踏まえながら考えました。

探究・ICT委員会の前身はICT教育推進委員会です。主要5教科を担当する若手の教員を主軸に2019年11月に発足され、同年9月に女子聖学院中highに設置されたフューチャールームの授業活用方法の検討や、ICT機器、アプリ活用事例の情報共有などを通して「ICT教育推進プロジェクト」が進められてきました。

約10ヶ月のICT教育推進委員会としての活動を経て、ICT活用のほかに「探究活動」が協議内容に加えられ、探究・ICT委員会と名称が変わりました。第1回と第2回は海外の学校教育事例を学ぶ会として、オランダのイェナプラン教育、アメリカのハイ・テック・ハイが実践するPBLを柱とした教育(映画『Most Likely To Succeed』を視聴)を取り上げ、これからの教育ビジョンについて示唆を得ました。そして、第3回では総合学習の6カ年構想を検討し、第4回では2021年度から導入される「一人1台iPad」体制の概要と学習アプリMetaMoji Classroomの使用例を共有し、さらにICTのC(コミュニケーション)を支える「デジタル・シティズンシップ教育」について学びました。

広い視野で新しい学びを積極的に取り入れながらも、教育ビジョンや建学の精神に常に立ち返り、女子聖学院らしさを大切にすスタンス。こうした研修会の積み重ねは、必ず生徒の良い学びにつながると考えています。



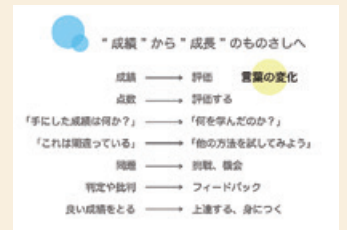
(上) 導入する学習支援アプリについて説明する大井教諭。(第4回)
(下) 生徒役になって学習アプリのお試し中。(第4回)



デジタル・シティズンシップ教育について語る川村教諭(第4回)



3月9日のミーティングの様子。教員が熱心に取り組んでいる様子が伺えます。



(上)「社会の尺度ではなく、どう成長してほしいかで評価することが大事です」と語る佐藤先生。

(下)ミーティング資料。量的な評価から質的な評価に変わることを言葉で例えて理解を促しています。(出所:スター サックシュタイン, 2018『成績をハックする』, 新評論)

ICEモデルで「主体的な学習者」を育てる

各教科の主任クラスで構成される「教科主任ミーティング」という研修が2月10日(水)に開かれました。聖学院中高が昨年掲げた「Student(教えられる存在)からLearner(主体的に学ぶ存在)へ」という教育コンセプトを、各教科ごとに具現化していくためのミーティングです。また昨年は環境の変化に対応するため、ICTや教育理論など様々な研修が学内で行われました。そこで培われた知見をもとにそれぞれの教員が自ら考えて動いていくことも、この取り組みでは期待されています。

「StudentからLearner」へ学びの転換をしていくにあたり、まず生徒には元々学ぶ力があり、興味さえ持てば自分で学ぶことができるという前提条件に立つ必要があります。そこに立脚し、生徒の興味を引き出し評価する手法としてICEモデルが採用されました。問いを立てることで学びのストーリーを作り、生徒が主体的に学びたい学習を成立させ、合わせてその学びを質的に評価できるフレームワークです。「教科主任ミーティング」もICEモデルに沿って行われています。流れとしては、その教科において、「本当に教えたこと、それを学ぶと何がかわるか」というコア概念を定め、生徒にどのような学習者になってほしいかを明確にし、その生徒像をもとに評価のものさし「ルーブリック」を作ります。2月10日のミーティングではこのことが共有されました。次回3月9日(火)に行われるミーティングでは、「どのような学習者になってほしいか」という生徒像まで作ります。「生徒の授業同様その時だけが研修ではありません。そこを起点に考えを進めてほしいです。教えてもらうのではなく自分たちで学びとった方が教員も楽しいはず」とミーティングのファシリテーターを務める佐藤充恵先生は言います。聖学院中高では教員も「主体的な学習者」として日々進化、成長を遂げています。

聖学院 中学校・高等学校

教科主任ミーティング



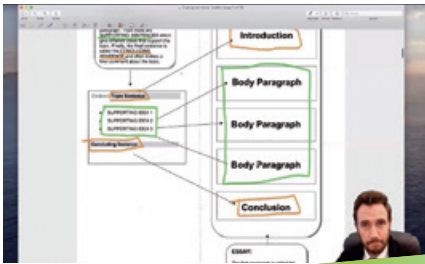
学年教育ミーティング

学年ごとの様々な取り組みの中で、生徒の成長を設計していくプロジェクト。このミーティングにおいても育てる生徒像を設定し問いを立てます。昨年の高1には学校行事やプロジェクトを通じて「あなたの賜物を最大化するには」という問いを1年間投げかけ続けました。

※ICEモデル
I(Ideas=基礎知識)C(Connections=つながり)E(Extensions=応用)の頭文字をとった学習・評価方法

聖学院大学

オンライン授業勉強会



オンライン授業勉強会の中で紹介された授業動画

R.ローランド先生の授業動画では、Telestream®社の提供するアプリ「ScreenFlow」を使用。グリーンバックの前でWebカメラから撮影し、資料と共に解説します。この動画は英語ライティング授業で配信しました。

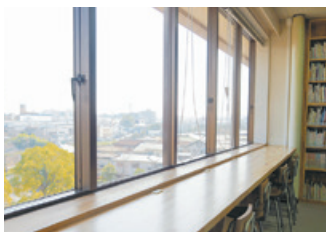
教員による教員のためのオンライン授業勉強会

2021年2月、Microsoft Teamsを使って聖学院大学の教員有志が集い、第4回目となる「オンライン授業勉強会」が開催されました。この勉強会は2020年度のオンライン授業化への対応の中で、教育の質向上をテーマに情報を交換し学び合う時となっています。

緊急事態宣言の発令を受け、聖学院大学の授業のあり方については教員・職員協働による「オンライン授業充実化プロジェクト」が組織化され、検討されました。5月の授業開始までに「A.双方向型授業」「B.オンデマンド授業」「C.課題型授業」の3つの授業形態の方向性が打ち出され、それぞれの授業の内容に合わせた形で実施されました。教員にとっても、学生の学習環境、授業配信方法、課題・評価の設計といった様々な壁を一つずつクリアしていくプロセスとなりました。

そのような背景の中、オンライン授業充実化プロジェクトのプロジェクトリーダーであるR.ローランド先生は、自身が学生時代から触れていたオンライン授業の経験や、教える立場の中で工夫してきたことを一人でも多くの先生と分かち合い、学生の学びにつなげ、授業を更に充実したものにしたいと考えています。「大切なことは、コロナが収まってもICT教育の重要性が失われることはない、という視点に立つことです。学生たちには例え困難であっても学びを諦めず、画面の向こう側にいる先生と向き合い、コミュニケーションを取り続けて欲しい」と語られました。

「オンライン授業勉強会」の中では、授業充実と同時に、大学は学生に対して交流の場をいかに提供することが出来るかという問題も提起されました。大学教育も改めて「学びとはなにか?」という大きな問いに向き合い、授業充実に向けた取り組みが進められています。



(上) オンライン授業導入にあたり、「授業支援サイト」を立ち上げました。このサイトではオンライン授業を受講するためのツールやマニュアル、履修や課題提出の方法等がまとめられています。

(下) オンライン授業を受ける際に利用者が対面にならないよう図書館4Fの窓側にカウンター席を設置しました。



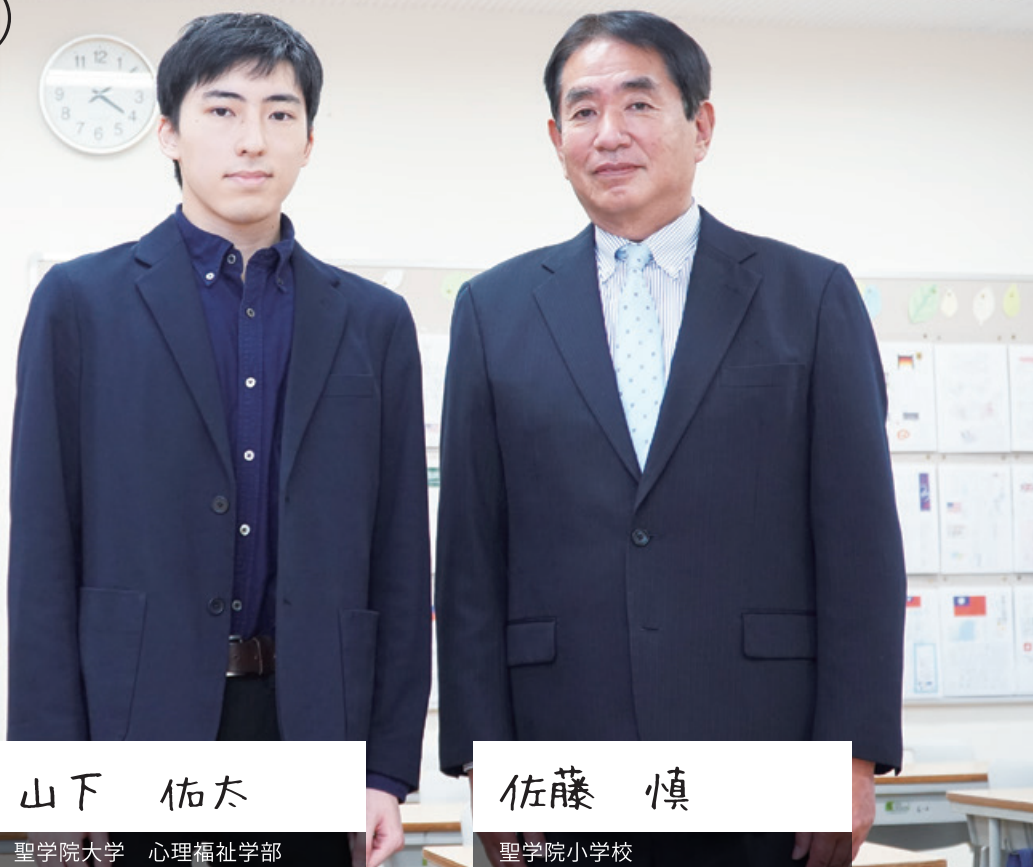
オンライン授業を受講する学生の様子。

(在校生の活躍特別企画)

聖学院小学校

60周年

記念対談



山下 佑太

聖学院大学 心理福祉学部
心理福祉学科 3年

佐藤 慎

聖学院小学校
校長

※撮影時のみマスクを外しています

聖学院大学心理福祉学部3年生(2021年1月現在)。聖学院小学校、聖学院中学校・高等学校を経て、聖学院大学に入学。聖学院大学1年時から岩手県釜石市でボランティアを行う。2019年9月に母校の聖学院小学校で防災講座を行った。

1979年より学校法人聖学院において教鞭をとる。女子聖学院中学校・高等学校教諭(社会科)、聖学院小学校教諭を経て、1990年聖学院アトランタ国際学校の開校に携わる。2008年聖学院小学校教頭。2012年聖学院幼稚園園長。2017年第11代目聖学院小学校校長として着任(園長兼務)。

聖学院小学校は昨年創立60周年。

旧校舎で学び、一昨年、卒業生として母校で防災教室を開催した聖学院大学の山下佑太さんと山下さんの当時の担任であり現在の校長である佐藤先生に聖学院小学校の軌跡と防災教室(防災講座)についてお話を伺いました。

今年で東日本大震災(以下震災)から10年がたちます。現在、聖学院大学に通う山下さんは聖学院小学校で5年生の時に震災を経験しました。大学では勉強の傍ら震災の被災地支援ボランティアに勤めています。山下さんは2年前、ボランティア活動を通して学んだことを今の子どもたちに伝えたいと聖学院小学校で防災教室を開催しました。山下さんがボランティアに参加し、母校の子どもたちに何か伝えたいと思った背景には小学校で学んだ建学の精神があったそうです。60年間、聖学院が子どもたちに伝え続けてきたことを佐藤先生に、その教えを胸に卒業した生徒が今の子どもたちに伝えたいことを山下さんに語っていただきました。

聖学院小学校の歴史と、校舎にまつわるエピソード

佐藤 聖学院には当時、幼稚園と男女の中高があったのですが、その間の教育をつなぐ小学校がありませんでした。そこで先生方から強い要望があり聖学院小学校が誕生しました。当初は女子聖学院の敷地内でしたが、奇しくも女子聖学院が使う予定で立てていた建物があり、翌年からその建物を使うことになりました。その建物が2013年ま

で使っていた旧校舎です。

私がこの小学校に最初に赴任してから40年が経ちます。その中でも2014年の新校舎の建設は大きな出来事の一つです。聖学院小学校には長らく培われてきた「よく学ぶ よく遊ぶ よく祈る」という教育方針があります。これは建学の精神を子どもたちに分かりやすく伝えるための3つの柱です。友だちと協力して勉強することや自ら主体的に学ぶこと、友だちとの関わりの中で身につくこと、自分のためではなくて他者のために祈ること、聖学院小学校ではそういうことを大切にしています。新校舎建設においても、これらを具現化することを念頭におきました。大きな特徴の一つとしては、教室と廊下を隔てる壁をなくしました。オープンな空間を作ることでグループ学習やアクティブラーニングがしやすくなりました。また旧校舎の右側にあった講堂のアーチ形のデザインは聖学院小学校の象徴として親しまれていましたので新校舎にも引き継がれています。

山下 僕が在籍していた頃はまだ旧校舎でした。よく廊下で友達と鬼ごっこしたり、図書館で読書したり、体育館で遊んだり、様々な思い出があります。一番覚えているのは小学校4年生の時に火災報知器を鳴

60th Anniversary

60年間で変遷した 聖学院小学校の校舎



1961
創立2年目から使っていた旧校舎。本来は女子聖学院用に建てられた建物でした。1年目は女子聖学院の敷地内で全校生徒11人で授業をしていました。



2012
新校舎竣工まで1年半ほど使っていた仮校舎。山下さんの妹さんも通っていたそうです。



2014
現在の校舎。旧校舎のシンボルであるアーチ型のデザインは残しつつ教室と廊下の間の壁がなかったり、今の学びに合わせた作りになっています。

らしてしまったことです。靴飛ばしで遊んでいたら偶然ボタンに命中してしまいました。

佐藤 そうした子はしょっちゅういます(笑)。聖学院小学校の子どもたちは元気が一つの取り柄でもありますから。山下くんも元気でした。

今でも覚えている東日本大震災当日の記憶

佐藤 震災があったのは山下くんが5年生の時で、その日、高学年の子どもたちと保護者を集めてハンドベルの発表会を講堂(現チャペル)でやっていました。講堂は最上階にあって天井が高い全面ガラス張りの建物でした。地震速報と同時に、すごい揺れが来て、子どもたちにしゃがんで背を低くするよう伝えたのを覚えています。子どもたちは本当に落ちていて、悲鳴ひとつ上げずに身を守る姿勢をとっていました。避難訓練が生きたのかな、と思いました。

山下 怖かったですね。

佐藤 ガラスには耐震補強で針金が入っていたので、割れるということは全くありませんでしたが、子どもたちに不安はあったと思います。それから揺れが収まって、寒い中、そのまま下校も出来ず、多くの子ども達が学校に残っていました。

山下 覚えています。当時、全面ガラス張りの壁面が波打っていました。ガラスがこれほど波打つものなのかと驚き、いつか割れるのでは、という恐怖と不安を感じました。ただ友達を見ると自然と冷静になり、みんなと同じように姿勢を低く保って揺れが収まるのを待っていました。

ボランティア活動のきっかけは建学の精神

山下 ボランティアに興味を持ったのは人の役にたちたいという思いがあったからです。そもそもは小学校のときに触れた建学の精神がきっかけだったと思います。それからずっと中学校も高校も聖学院なので、「神を仰ぎ 人に仕う」という精神が身近にあり、それが他者に貢献したいという思いにつながっていると感じます。

佐藤 先ほどの「よく学ぶ よく遊ぶ よく祈る」で言うと、他者のために祈るだけでは真に仕えていくことにはなりません。祈るだけではなく知識や技能を用いて他者のために働いて初めて仕えることになります。学ぶことや遊ぶことの先に「人に仕える」があるのが聖学院小学校の教育理念です。山下くんはそれがボランティアという行動にちゃんとつながったのだと思います。

自分の経験を子どもたちに還元するため防災教室を開催

山下 小学校で防災教室をやりたいと思ったのは、やはりこの場所で震災を経験した事が一番です。また小学生でも自分で自分の身を守り、さらにできれば他の人の安全も一緒に守って欲しい、という思いがあったからです。ボランティアで訪れた岩手県釜石では、小学生が率

先して、他の小さな子どもたちを避難させたエピソードがあります。そのエピソードにふれて、大人はもちろん、子どもたちにも人を助けられることを知ってほしい、と強く感じました。

ボランティア活動で知ったことは本当にいろいろあります。実際に被災地に行ってみると、メディアが伝えていた印象とはだいぶ異なっていました。震災から7年以上たっているのに、まだまだ支援が足りないところもいっぱいありました。やはり自分から行動しないと何も分からないし始まらないと感じました。そのことも知ってほしくて小学校での防災教室を提案しました。

佐藤 小学校の卒業生である山下くんがそうした志を持って帰ってきてくれたので、企画の段階からとても楽しみでした。また実体験の話は、未経験者の話と比べて、ずっと重みがあります。今の小学生は6年生でも震災当時1〜2歳ですから震災の記憶がありません。そういう子どもたちが、自身の地震の経験と被災地をリアルタイムで見ていた経験をもつ卒業生から話を聞くのは、単なる防災教室とは違う意味があります。実際、山下くんの授業を見て、とても感動しましたし、来てもらって良かったと思いました。山下くんについても、私達がこうなって欲しいと願う人に育ってくれたのは本当に嬉しいですね。

山下 防災教室自体は、とても緊張しました。どうすれば小学生に伝わるのか、最初は友人と試行錯誤しながら進めていました。ただ事前に児童学科の先生や他の方にアドバイスをいただいたので、そのアドバイスを活用して無事に終えることができました。最後に子どもたちから一言コメントをもらったのですが、それを見る限り上手く伝わったようで、本当に良かったです。

佐藤 折角の良い機会なので、是非今後も続けていきたいですね。

(取材日/2021年1月)



聖学院小学校在校時の山下くん



2019年9月に実施した防災教室の様子。

11:00~11:45 防災講義
11:55~12:25 防災グッズ制作
12:30~ 振り返り

聖学院大学より学生7名が参加

まだまだあります!

Seig NEWS

学生も生徒も教員も職員も
次のステップへと
日々新しい試みをしています。

聖学院大学



政治経済学部 公開講演会 「ポストコロナ時代の労働法を考える」開催

聖学院大学政治経済学部は、1月13日(水)に公開講演会「ポストコロナ時代の労働法を考える」をオンライン・リアルタイム配信により開催し、若者の労働・貧困問題に取り組んでこられ、政治経済学部で教鞭をとられているNPO法人POSSE代表今野晴貴先生に、頼りになる「武器」としての労働法についてお話しいただきました。「ポストコロナ」とも呼ばれるこれからの時代、雇用環境の深刻さと労働法の重要性について考える貴重な機会となりました。



聖学院キリスト教センター



オンライン礼拝をアーカイブ化! コロナ禍での活動を振り返る 「全学礼拝懇談会」を開催

聖学院キリスト教センターは、毎週火曜日から金曜日まで全学生・教職員と共に「全学礼拝」を行っています。今年度はコロナウィルスの影響により、オンラインにて礼拝を実施しました。また同センターは、毎年全学礼拝懇談会を開催しています。この懇談会ではチャプレンや教職員が集い、キリスト教諸活動について祈りと課題を共有しています。今年のテーマは「オンライン全学礼拝を振り返って」と題し、コロナ禍におけるオンライン礼拝について振り返る時を持ちました。なお、2020年度の全学礼拝はアーカイブとしてキリスト教センターFacebookからご視聴いただけます。



聖学院大学

聖学院中学校・高等学校



聖学院大学ボランティア活動支援センター×聖学院中高 震災経験を未来への備えにつなげる授業

「あなたの住んでいる町は、誰が守るのでしょうか。」中学1年生に対する伊藤豊教諭の問いかけから始まった授業は、聖学院中学校で行われているL.L.T. (Learn Live Together: 共に学び、共に生きるという意味の造語) です。2021年2月17日(水)には「防災」をテーマに、聖学院大学でボランティア活動をしている学生と中学生をオンラインでつなぎました。震災当時、小学生だった学生たちが体験した被災経験やその後のボランティア活動を中学生に紹介し、「今私たちが出来ることは何か」という問いを共有。震災経験を過去の出来事にするのではなく、未来への備えにつなげることの大切さを学びました。



※学校法人聖学院はグローバル・コンパクトに署名・加入し、SDGsを目指した活動を行っています。

※SDGs…2030年までの実現をめざし掲げられた、17の目標と169のターゲットからなる「持続可能な開発目標」



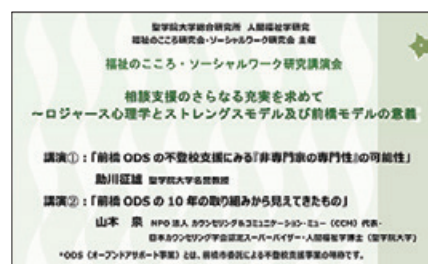
聖学院大学出版会の新刊をご紹介します

聖学院大学出版会では、2020年に4冊の書籍が発刊されました。3月に土方透編著、G・ヴェグナー/J・ヴァイス/N・ルーマン/清水正之著、『世界社会の宗教的コミュニケーション：共鳴の醸成』が、8月には丸山久美子著、『作田明の生涯：犯罪精神医学者の歩んだ誇り高き里程』が発刊されました。また12月には森田美千代著『マーティン・ルーサー・キング・ジュニア：そのキリスト教と民主主義』と村松晋著、『近代日本のキリスト者：その歴史的位相』の2冊が発刊されています。加えて2021年3月には、菊地順著、『M・L・キングと共働人格主義』が発刊される予定です。



「不登校支援の現場」研究と実践のつながり 大学院卒業生と指導教授による講演会

2月20日(土)に、福祉の哲学および理論を探究する「福祉のこころ研究会」と、実践に基づいたソーシャルワーク原理を探究する「ソーシャルワーク研究会」が合同でオンライン講演会を開催しました。講演者には聖学院大学名誉教授の助川征雄先生と、NPO法人カウンセリング&コミュニケーション・ミュー(以下、CCM)代表で聖学院大学大学院卒業生の山本泉先生をお招きしました。CCMで行っているオープンアサポート事業(ODS)とは前橋市委託による不登校支援事業の名称で、不登校となった生徒とその家族の支援を目的とし2009年より活動しています。生徒たち一人ひとりの強みや長所に光を当てる支援事業から、研究と実践の有機的つながりを学ぶ時となりました。



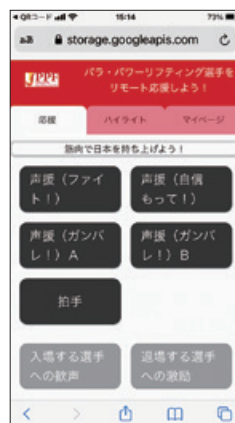
若き環境活動家、露木志奈さんによる 現代社会の授業

2月26日(金)、高2の現代社会授業の最終日は、環境活動家の露木志奈さんを迎えて、環境問題についてのディスカッション授業を行いました。露木さんはバリのグリーンスクールを卒業して慶應SFCに入学したのですが、現在は大学を休学し、講演を中心とする環境活動を行っています。今回は講演ではなく、「レジ袋VSエコバッグ」「リユースVSリサイクル」といったテーマで意見を出し合うディスカッション型の授業。クリティカルな視点でものごとを見ることで環境に対する理解を深めていきました。



パラ・パワーリフティングの大会を リモートで応援

1月30日(土)に全日本パラ・パワーリフティング国際招待選手権大会が開催され、女子聖学院中高と聖学院中高合同のバラスポーツプロジェクトはリモート応援の協力を行いました。リモート応援は、WEBの応援ページで応援者がボタンを押すことで無観客の試合会場に声援が流れる仕組みで、「ファイト!」「ガンバレ!」などの掛け声や、入退場時の歓声など、再生されるすべての音声の企画・収録を聖学院バラスポーツプロジェクトが担当しました。



声援の録音風景

聖学院小学校



長崎からオンライン被爆者体験講話

2月16日(火)は、本来ならば6年生が修学旅行に出発する日。この日は、飛行機に乗り、長崎空港からバスで平和公園に移動して、被爆者体験講話を聴くというプログラムでした。

今回、実際に長崎へ行くことはできませんでしたが、「被爆者体験講話」だけは、オンラインにより全く同じプログラムで実現することができました。

6年生がチャペルに集合すると、正面の大きなスクリーンに長崎の画面が映され、ご挨拶のあと、被爆者の方のお話が始められました。ご自身の体験を通しての原爆のおそろしさが語られ、戦争のむなしさ、人の痛みや悲しみ、平和の尊さ...言葉の一つひとつがびりびりと肌で感じられるひとときでした。距離の離れた長崎とでしたが、しっかり気持ちが通じ合えたすばらしい会となりました。

来年は、次の6年生が実際に長崎に行って、今回のような貴重なお話を直接うかがえることができるようにと願っています。



聖学院幼稚園



年長組保育参観

2月18日(木)、幼稚園での成長の姿・保育の中に取り組んでいることを見ていただくときを「保育参観」と称して、保護者の方々に久しぶりに集まっていただきました。

年長組全員での合奏、クラスごとのハンドベル演奏、大きな声で歌う代わりに、手話をしながらの歌を披露しました。始めと終わりの挨拶、曲目紹介も子どもたちが担当し、年長組ならではの頑張る姿を見ていただくことができました。



聖学院みどり幼稚園



お餅つき会

2月19日(金)、園庭でお餅つき会を行いました。毎年保護者の方々にお手伝いをいただき一緒に行うお餅つき会ですが、今年はコロナウイルス感染予防のために、園児たちと教職員のみで行うこととなりました。

よく晴れた朝、教職員がお餅つきの準備をしていると、子どもたちはホカホカのふかしたもち米の匂いを嗅ぎにきたり、かまどの火をのぞき込んだりして、興味津々で待ちきれない様子でした。お餅つきを始める前に、年長さんたちがお味噌汁に入れる野菜を切って準備をしてくれました。年少さんたちから順番に一人ひとり杵を持って楽しみながらお餅をつきました。お餅の味付けは、あんこ・きなこのり・納豆の全部で4種類。子どもたちはそれぞれ好きなお餅を取って、年長さんたちが作ったお味噌汁とともに、とても美味しくいただきました。

来年はぜひ保護者の皆さまと一緒に餅つきを楽しみたいですね。



Our Mission



（大学キャンパス）
聖学院大学
教育支援課・教育企画課

教育支援課・教育企画課は、大学の授業を支え学生の学びを支援する部署で、以前の教務課にあたります。教員からの授業準備やカリキュラム等の相談のほか、学生からの成績、履修、資格、海外留学・研修の問い合わせや相談に応じています。

昨年4月の緊急事態宣言で業務内容に大きな影響を受けた部署の一つです。それ以前もUNIPA*を通じて学生に課題を提出させることはありましたが、授業のWeb配信や双方向授業は行っていませんでした。そのためオンライン授業や動画配信の技術的環境づくり、質問への対応、UNIPAやTeamsの使い方に関する問い合わせが急務でした。また、学生にとって一番重要なことは授業を受けることなので、学生が分からないことをいつでもWeb上で確認できるように授業支援サイトを作りました。このサイトは結果として教員向けのQAとしても役立っています。

UNIPAにはWebラーニング機能が元々備わっていましたが、あまり活用されていませんでした。しかし授業がオンライン化したことでUNIPA自体の普及に加えWebラーニングも充実しました。これは教育面における良い変化だと思います。今後も予習復習や授業へのフィードバックに活用していけると見込んでいます。

私たちは学生に対して、どうしても厳しく接する場面があります。充実した学生生活を送って卒業してほしいからこそその厳格さでもあり、学生が成長していく姿を嬉しく思い、見守っています。教育支援課・教育企画課一同、他部署同様学生に寄り添う姿勢を大事にしています。

（取材日／2021年2月）

*聖学院大学の学生・教職員を中心とした関係者専用プラットフォーム。
使い方の一例としてオンラインで休講確認や書類の申請などができるシステムです。



●STAFF

【教育支援課】原田貴士・ングワー路津子・飯田純・鈴木典子・田口敦士・大野しなの・村上野花・秋元砂織・山内恵子・佐々木あけみ・佐藤恭子・高山祐子・市川裕子・川村仁美・小井田夏美・仲俣実穂
【教育企画課】成瀬知・国府田秀行・松田頼子

●オフィス 8号館 1F

Our Mission

1. 学生の窓口的部署。
学生が気軽に聞ける雰囲気や心がける
2. 教員にとっても窓口的部署。
教員が相談して良かったと思える対応を心がける
3. 仕事に優先順位や締め切りを設け、
効率的に業務をこなすよう心がける

聖学院歴史探訪

#12 聖学院教育の歴史

- 建学の精神・中 -



〔石川角次郎〕（出典：<https://www.seig.ac.jp/history/chronology/>）

小田信人は右の石川角次郎の言葉〔聖学とは聖人の学である〕を解説して「聖書に書かれている聖徒（ハギオス）という言葉は聖者また聖人と訳して間違っていない。石川先生は聖書でいう『ハギオス』を聖人と呼んでいるのである」と言い、「石川先生が意味する『聖人』とはキリスト信者・キリストの弟子を指す」と書いています。

次に、平井庸吉に言及して「平井先生は『聖学院』と名づけた意義について『聖書を研究する学院』また『聖なる御名の上に建てられた学院』と理解され」た、とあります。

平井庸吉はバーサ・F・クローソンのあと第二代の女子聖学院院長となった人で、石川角次郎の召天のあと九年間聖学院中学校校長も兼務しました。その平井庸吉の言葉に聞いてみましょう。

（次号に続く）

出典：聖学院キリスト教センター編『聖学院の精神と歴史』聖学院ゼネラル・サービス、2006年版（出典より一部変更）

学校法人 聖学院

理事長／清水 正之 院長／山口 博
〒114-8574 東京都北区中里3-12-2 Tel 03-3917-8351
ホームページ <https://www.seig.ac.jp/> E-mail pr_h@seigakuin-univ.ac.jp

■さいたま上尾キャンパス

聖学院大学

・政治経済学部／政治経済学科
・人文学部／欧米文化学科 日本文化学科 児童学科
・心理福祉学部／心理福祉学科
学長／清水 正之 創立／1988年 〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎1番1号 Tel 048-781-0925

聖学院大学大学院

政治政策学研究所／文化総合学研究所／心理福祉学研究所
創立／1996年 〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎1番1号 Tel 048-780-1801

聖学院みどり幼稚園

園長／山川 秀人 創立／1978年
〒331-0045 埼玉県さいたま市西区内野本郷820 Tel 048-622-3864

■駒込キャンパス

聖学院 中学校 高等学校

校長／角田 秀明 創立／1906年
〒114-8502 東京都北区中里3-12-1 Tel 03-3917-1121

女子聖学院 中学校 高等学校

校長／山口 博 創立／1905年
〒114-8574 東京都北区中里3-12-2 Tel 03-3917-2277

聖学院小学校

校長／佐藤 慎 創立／1960年
〒114-8574 東京都北区中里3-13-1 Tel 03-3917-1555

聖学院幼稚園

園長／佐藤 慎 創立／1912年
〒114-8574 東京都北区中里3-13-2 Tel 03-3917-2725

●インターネットでの寄付のお申し込みについて

クレジットカード（VISA、MasterCard）をお持ちの方は、お申し込みから入金までご自宅等で、PC、スマートフォン、携帯電話からインターネットによるお手続きができます。下記URL、QRコードにアクセス下さい。

<https://www.seig.ac.jp/asf/>



住所変更・広報誌の発送停止・お問い合わせ

<https://www.seig.ac.jp/asf/contact/>

学校法人聖学院ASF事務局

Tel 03-3917-8530（月～金 9:00～17:30）

